

コミュニケーション英語 I 授業実践

— 苦手意識の強い生徒と向き合いながら —

田中 泰明

1. はじめに

平成 21 年 4 月、初任者として本校に赴任した私は、初めての授業で衝撃的な体験をした。私が本文の読み方を確認するため、本文を聞かせた後、文ごとに Listen & repeat をしようとしたときであった。

T: Repeat after me. A smile is universal.

Ss: ...

生徒たちは私の指導を聞いていなかったかのように、だれひとりとして復唱しなかったのである。卒業後に聞いたのだが、smile や universal の読み方がわからず、音読しようにもできなかったようだ。

それからの 4 年間、私の授業は楽しくなくて、わかりにくいという評判がつきまわってしまった。授業を成立させるため、大きな声を出して私語や居眠りを注意した。それでも、私に対して反発するかのように、私語や居眠りをやめない生徒もいた。憂鬱な気分で教室へ向かい、英語を嫌がる生徒たちの顔を見る毎日であった。まじめな生徒もいたが、彼らの英語力を向上させることもできなかった。

平成 26 年 3 月、初めて 3 年間担任として持ち上がった学年が卒業し、4 月からは新課程初年度となる 1 年生の担任をすることとなった。新学習指導要領には、授業をコミュニケーションの場面とするため、英語で授業を行うことが明記された(文部科学省, 2010, p. 6)。卒業した生徒に対してとっていた指導方法をやめ、ひとりでも多くの生徒に英語の授業を楽しんでもらい、英語の力をつけてもらいたいと考えて、授業を根本から変えた。

本稿では、新課程初年度に担当した 1 年生のコミュニケーション英語 I の授業実践について、活動内容とそのねらいや指導上の留意点などに触れながら紹介していく。

2. 本校生徒の現状と年間到達目標

本校には英語に対して苦手意識の強い生徒が多い。中学時代に英検 3 級を取得した生徒もいるが、多くの生徒は中学 1 年生の段階から英語を苦手としている。瀧沢(2013, pp. 19-20)は、英語学習障害傾向の生徒の特徴を挙げている。音読ができない、b と d を写し間違える、文章を写すのに 1 文字ずつ見ながら書くなど、その特徴に合致する生徒が、本校には 1 クラス 40 名の中に 2 名ほどいる。また、進路については就職が 4 割、進学が 6 割である。進学希望者でも受験で英語を使用する生徒は少ない。

以上のことを踏まえて、1 年生英語科の年間到達目標を 2 つ掲げた。

- 1) 生徒の英語嫌いや英語苦手意識を軽減する。
- 2) 就職や進学後に最低限必要な一般常識としての基礎的な英語力を定着する。

これらの目標を達成するために、田尻(2009, p. 59)が挙げているやる気の素となる伸長感・達成感・満足感を味わえるようにすることと、瀧沢(2013, p. 5)が述べている特別支援教育の視点から生まれた、教室にいるすべての生徒にとってやさしいユニバーサルな授業を行うことを意識した。

1 年生英語科では、コミュニケーション英語 I が 4 単位分開講されている。1 クラス 40 名を 2 グループに分けて、習熟度別学習は行わず、年間を通して同じメンバーで展開している。私は 1 年生の担任をしていたが、週 4 時間全て同じグループで授業を行うと、担任をしていても授業をもたない生徒が出てきてしまう。このことは生徒をほめるタイミングを逃すことにもつながり、学級経営上問題があった。そのため、私は教科書の文法以外の内容(以下、本課とする)を担当し、もうひとりの先生は文法を担当した。このようにして、2 分割のクラスを週 2 時

間ずつ計4時間担当することとした。

教科書は *COMET English Communication I* (数研出版) を使用した。1年間で全レッスンを無理なく終えることができ、その中に基本的な文法や語句が配置されているため、基礎的な英語力の定着が可能である。また、本文の題材が生徒にとって身近であり、本文の各セクションが60～70語程度で構成されているため、生徒が集中力をとぎれさせることなく読み進めることができ、繰り返し学習も可能である。そのため、英語嫌いの生徒にもとつきやすく、定着する段階まで無理なく進めることができると考えた。また、絵や写真が豊富に使われており、視覚的に楽しめるレイアウトになっている。さらに、What Do You Think?(本文に関連した簡単な自己表現活動)や Key Expression(本文中の重要表現)などのコーナーがあり、簡単な英語を使った表現活動を取り入れやすい構成となっている。

3. 本課指導の目標と典型的な授業のパターン

前章で述べた年間到達目標を達成するため、私が担当したコミュニケーション英語I本課では、以下の6つの項目ができるようにすることを目指した。

- (a) 授業中の英語の指示を聞き、内容を理解できる。
- (b) 本文に関連する絵や写真についての英語の質問に答えられる。
- (c) 本文の内容に関する質問に答えられる。
- (d) 本文をスラスラと音読することができる。
- (e) ことばの働きに着目した重要表現を聞いて理解し、使用場面に応じて適切にことばを用いることができる。
- (f) 本文の内容に関連するトピックについて英文やスピーチができる。

そして、週2回の授業を以下のように典型的なパターンを決めて行った。

週の1回目の授業	週の2回目の授業
① ウォーミングアップ	① ウォーミングアップ
② 音読テスト	② 時間の調整
③ 本文の内容理解	③ 音読練習
④ 次回予告など	④ 次回予告など

これは、突然の変化を嫌う特別支援を必要とする生徒への配慮と、生徒が主体的に取り組める条件となる「見通し」をもたせることがねらいである。(瀧沢, 2013, p.36)

以下の章では、各授業がどのように展開されるか紹介していく。なお、「週の2回目の授業」の「時間の調整」では、「本文の内容理解」の続きや Key Expression, Listening 問題などを行い、パターンにはめきれない部分を補う時間とした。

4. ウォーミングアップ

まず、ウォーミングアップを紹介する。本課の指導に入る前に、5分程度使って行っている。ウォーミングアップでは、英語を用いて、あいさつ、曜日・日付・天気の問題、出席の確認をする。

このウォーミングアップには、3つのねらいがある。1つ目は、英語のあいさつから始めることで、他の座学の授業とは違うことを意識させ、声に出して英語を練習する雰囲気を作ることである。2つ目は、曜日・日付・天気などの基本的な単語を定着させることである。3つ目は英語が苦手な生徒でも英語のやり取りを理解できたという経験をもたせることである。毎回繰り返し行っていると、苦手な生徒でも教師のものまねをするようになり、英語を楽しむ雰囲気ができてきた。

5. 本文の内容理解

ここからは実際の本課の指導である。まずは、本文の内容理解の指導である。本課指導の目標の(b)(c)を達成することを目指し、実施している。準備物は、教科書をコピーしたプリントと Comprehension 2で用いる授業用ワークシートのみである。指導の流れは以下の6段階である。

- 1) Introduction
- 2) Pictures
- 3) New Words
- 4) Points to Check
- 5) Comprehension 1
- 6) Comprehension 2

1) Introduction については、各 Lesson の初めの授業のみ行う。教科書の別冊資料集にある題材内容の

補足資料を生徒各自に読ませた後、題材資料の中で生徒が興味をもちそうな内容を解説する。その後、導入ページの絵や写真を用いて、2問程度の簡単な英語の質問に答えさせる。2) Pictures では、教科書に載っている写真や絵を用いて、2問程度の簡単な英語の質問をする。この活動を通して、本文の内容へと引き込んでいく。その後、各セクションの右ページを使い、3) New Words で単語の意味を確認してから、4) Points to Check (本文中の表現を空所補充で言い換える活動)で代名詞の指示内容などを確認する。そして、5) Comprehension 1 では、教科書の Comprehension の問題に解答させ、大まかな内容を把握する。この1)~5)を25分をめぐりに行うことで、生徒の集中力を切らさないようにしている。本文和訳はしないが、次章の音読指導の際に配布するプリントで確認できるようにしている。6) Comprehension 2 では、教科書指導用 CD に掲載されている授業用ワークシート(簡単な英問英答)を解かせる。セクションの復習と次のセクションへのつなぎとして、音読テストも実施する。

6. 音読練習と音読テスト

内容を理解した後、目標の(d)を達成できるように、音読指導を行っている。音読指導の有効性は論を待たないが、私の授業では音読に多くの時間を費やしている。私が音読に力を入れるのは、口頭では答えられても定期テストでは答えを書けず、いい点数を取れない生徒がいることに気づいたからである。

まず、音読テストは、上山(2011, pp.38-39)の速音読を参考に、10秒間で25語音読できるかどうかを合格基準にした。教科書本文を30語ずつ程度に2分割したもので、音読テストを行った。また、音読練習を週末課題とし、「週の1回目の授業」で音読テストを実施し、評価に組み込んだ。

また、音読テストのために、フレーズリーディング用の本文データを活用し、以下のように、番号、英語、日本語、累計語数を記載した音読プリントを毎回準備した。

1	Can you imagine	想像できますか	3
2	a world	世界を	5
3	without instant noodles	インスタントラーメンなしの	8

音読練習のときは、このプリントのほかに、キッチンタイマーも準備した。

次に、実際の指導過程である。指導過程については、安木(2010)を参考に、7段階の指導を行った。

- 1) Check the pronunciation of words
- 2) Listen
- 3) Listen & repeat word by word
- 4) Listen & repeat phrase by phrase
- 5) Overlapping
- 6) Buzz Reading
- 7) Rehearsal Test

まず、1) Check the pronunciation of words では、発音が難しいと思う単語に対して、カタカナで読み方を板書する。これは、英語が苦手な発音がわからない生徒への配慮と、英語に自信がない生徒に対してのお守りのような効果をねらったものである。その際、world などのカタカナ語になっている単語については、あえて「ワールド」と日本語に近い発音を書くようにしている。これは、正確な発音を表記することによって、かえって読むのが難しくなるのを避けることと、英単語の world とカタカナ語のワールドを一致させることを目的としている。また、英語が得意な生徒に対しては、難易度を上げるため、できるだけ読み方をプリントに書かないように指示している。2) Listen では、教師の音読を3回聞かせている。少し多いと感じられるかもしれないが、安木(2010, p.17)にあるように十分に聞かなければきちんとした音読はできないからだ。この3回で、本文中の読めない単語の発音を確認させ、音読するための心の準備をさせている。3) Listen & repeat word by word は2回行い、読めなかった単語がないか確認する。この段階は、全ての単語の読み方がわかり、発音できたと生徒に実感させることが目的である。やや退屈で時間がかかるが、いきなり4) Listen & repeat phrase by phrase から行い、つまり、授業のテンポが悪くなってしまった経験があるので、この段階を採用している。4) Listen & repeat phrase by phrase は、チャンクの生成を目的として2回行う。5) Overlapping は、教師が読むのに合わせて生徒が発音する。これを3回行い、英文のイントネーションと、テストに合格で

きるスピードを体感させている。6) Buzz Reading では、各自 1 分間練習し、7) Rehearsal Test は教師が 15 秒計り、生徒は個人で実際に言えるかどうか確認するというのを 2 回行う。

また、テスト前にも準備を行う。生徒は復習のため、教師が 2 回読むのを聞き、1 分間 Buzz Reading をして、Rehearsal Test を 2 回行ったうえで、ひとりずつテストを受ける。テストの際に、読み仮名を書いた音読のプリントは使用できることとしている。全員が読み仮名なしで英単語を読めるようになってほしいが、そこまでの時間をかけられないことと学習障害傾向のある生徒への配慮もあり、このようなルールとしている。テストの間、生徒たちはほかの生徒の発表を聞いたり、本文の内容理解 1) の補足資料を読んだり、6) の問題を解いている。

以上のように、自信をもって音読できるように、テストまでに 5 回以上本文を聞き、10 回以上の音読練習を行っている。その後テストを行うと、3 回以内に約 95% の生徒が合格できている。残りの生徒についても、放課後の個別の指導などによって、合格できている。

7. 重要表現

各レッスンの終わりでは、Key Expression を用いて、ことばの働きに着目した重要表現について指導している。これは本課指導の目標の(e)に対応する。実際の指導場面では、ふたりの 2 往復程度の会話を聞かせ、穴埋め方式のディクテーションを行い、表現の使用場面とその働きがわかるようにしている。最後に、Key Expression の重要表現を用いて 1 文を作る活動を行っている。

8. 自己表現活動

最後に、自己表現活動である。これは本課指導の目標の(f)に対応する。実際の指導場面では、各セッションの後すぐに自己表現活動を行うことは、時間の制約でできていない。そのため、長期休暇中の課題として、“What Do You Think?” のテーマに基づいた英作文を行った。

事前に、コンピュータ室でインターネット上の辞書や翻訳のサイトを紹介し、英語を使ったコミュニケーションを行うツールの活用方法を学習している。

9. 次回予告など

授業の終わりには、今日できるようになったこと、未提出課題の確認、次回の課題の確認を兼ねた次回予告を 5 分ほどで行っている。これが授業に組み込まれていることで、チャイムと同時に終わることができ、生徒も喜んでるように感じている。

10. 終わりに

以上のように、平成 25 年度のコミュニケーション英語 I の授業実践について紹介してきた。平成 26 年度は 3 年生の担任となり、旧課程のリーディングを担当したため、2 年生での実践について述べるができない点はご了承いただきたい。授業を改善した後の 2 年間は、いつ「わからない」や「楽しくない」と思われて、いやな空気になるのではないかとこの恐怖との戦いでもあった。年度が終わると、何とか楽しい雰囲気を持続したまま、授業を最後までやり切れたことに対してホッと胸をなでおろす状態であった。

本稿および私の苦い体験が、英語を苦手とする生徒を対象に日々の授業を行っている先生方の一助となれば、幸いである。

参考文献

- 上山晋平(2011)『目指せ！英語授業の達人 17 45 の技で自学力をアップする！ 英語家庭学習指導ガイドブック』明治図書出版
- 瀧沢広人(2013)『目指せ！英語授業の達人 21 英語授業のユニバーサルデザイン つまづきを支援する指導&教材アイデア 50』明治図書出版
- 田尻悟郎(2009)『(英語)授業改革論』教育出版
- 文部科学省(2010)『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』開隆堂出版
- 安木真一(2010)『目指せ！英語授業の達人 10 英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法 54』明治図書出版

(兵庫県立夢前高等学校教諭)